

黒男ダーティーサー ジェリー

炭酸ソーダ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

怪我によって脚に麻痺が残るウマ娘は、秘書さんから噂を聞いた。

曰く「神のようなメス捌きで、あらゆる怪我を治す男」

なお、無免許の様様。

目次

1 枠1番	
イレブン・バツク	
	1

1 棒1番 イレブン・バツク

待ちに待った新バ戦。

「残り400！ 混戦模様、誰が抜け出してくるのか!？」

脚は溜めてある。大外だけど、ここからなら——

「大外から5番が突っ込んできた！突っ込んで…いや、もう突き抜けている!」

あと300。250、200…。

「抜けた抜けた！ 2バ身、3バ身といったところでゴール!」

「素晴らしい追込でしたねえ。今後の活躍に期待が高まります」

そうだ。今回は勝ったけれど、まだまだ始まったばかり。気を引き締めないと——

!?

「…おや？ 一人、蹲っています」

「これは…優勝した5番です！どうしたのでしょうか!？」

そこからの記憶はない。目が覚めた時に見せられた新聞が、私の評価を下していた。

『栄光一転、競走能力喪失か』

眼前も展望も、全ては黒く塗りつぶされた。

1 枠 1 番

イレブン・バック

ウマ娘。

彼女たちは走るために生きている、そう言っても過言ではない。そもそも、人並み外れた馬鹿力を有しているのに、彼女らの第一目標はレースである。それは魂…ウマソウルに刻みこまれた、いわば本能であると考えられる。

しかしながら、人の身体に無理矢理詰め込まれたエネルギーは、しばしば身体を蝕むことになる。全力で走りたい本能がある一方、走れば走るだけ走行能力の喪失の危険性も高まっていくのである。

その危険性があるのに、ウマ達はとにかくレースで走ることをライフワークにする。それはともすれば狂氣的であり、まさしく本能的である。

そんな彼女たちが、走れなくなつたとしたら。すつぱりと諦められる者もいれば、な

んとか足掻こうとする者もいる。彼女は、後者だった。

「…」

一人の少女が歩く。ぴよこん、と頭から突き出た耳が、何者であるかを無言で伝えている。

そこは人気のない道であつた。少なくとも近くに人工物はなく、草原にただ砂地の道がまっすぐ伸びているだけの野原である。彼女は、走るわけでもなくとぼとぼと歩いていく。

その足取りは、重そうである。それは彼女が俯き加減であるだけでなく、片脚を引き摺りながら歩くからである。

ウマ娘は、耳も鋭い。彼女の耳は、微かに聞こえる波の音をしっかりと捉えている。目的地が近づいていることを察し、少しの緊張を感じていた。

彼女は、元々期待を大いに受けていた。地元では負け知らず、中央トレセンの試験にも余裕を持つて合格し、模擬レースでも良い結果を出していた。トレーナーにもすぐにスカウトされ、新バ戦も一番人気と、順調な競走人生をスタートした。

…はずだった。全てはレース後の怪我に帰結する。

「股関節の脱臼です」

医師の診断を受け、彼女のトレーナーが青い顔を見せた。

「脱臼って…治りますよね？」

「脱臼自体は治せます。しかし…」

「しかし…？」

「…坐骨神経が損傷している可能性があります。少なくとも、レースへの参加は勧められません」

その言葉は正しく、一ヶ月、二ヶ月と経つても、彼女の脚には麻痺が残っていた。

「…」

色々な医者に診てもらった。しかし返ってくるのは同じ言葉。『日常生活なら…』である。

『どれだけ走れるのかわからない。そもそも、医者に走ることを禁止されている』

ある日、トレーナーが言った。

『麻痺が治る見込みは薄い。そして、トレセンとはレースを走るウマが集う場所である』
やんわりと、しかし確実に。

『つまり——』

「契約解除、それと引退勧告、か」

中央トレセンのレベルは高い。そんなことは子供でも知っている。怪我が重いことも知っている。しかし、それでも——例え地方に行こうとも——レースに出たい。その思いがあつたからか、元トレーナーの言葉にはそれほど驚かなかつた。

しかし、今の脚では地方どころかヒト息子とのかけっこにも負けかねない。そんなことを考えていた時、

「あら」

「あつ…たづなさん。こんにちは」

「こんにちは。…何か、ありましたか？」

心配げな表情のたづなに対し、彼女は自嘲気味に答える。

「トレーナーとの契約を解除しました。あと…近々、退学届も渡しに行くかと思ひます」

「…そうですか。それは、残念ですね」

「しばらくお世話になりました。それじゃあ…」

お辞儀をして立ち去ろうとする彼女。しかし、その腕を掴む者がいた。勿論、たづなである。

「万策尽きたなら…少しだけ、話を聞いていきませんか？」

「…あれか」

彼女が目指していたのは、海に突き出た岬だった。あまり人も近付かない、しかも落とし穴のような深い穴があり、危険な場所として地元では有名な場所である。

緑色の理事長秘書は、彼女にこう告げていた。

曰く「何でも治す、神のような医者がいる」

曰く「その分対価も高く要求される」

曰く「ツギハギのある瓢箪のような人である」

胡散臭いが、語ったのはあの駿川たづなである。もはや継るようにして、今日彼女はそこを訪れた。

府中からはやや遠く、どうやっても帰るのは門限以降になる。しかしその点は、たづなが上手く調整してくれるとのことだった。

そこには平屋の建物があった。この時代にはなんとも古めかしい様式というか、別荘のような造りである。

建物が近くなると、それまで以上にゆつくりと、ゆつくりと歩く。この辺りには深い縦穴があるという話を気にしているのである。

そんなことをしながら、10秒、20秒、30秒も経つただろうか。建物——家と呼ぶべきか——の玄関と思わしき扉の前に立つ。しばらく息を整えてから、意を決してノブを掴もうとしたその時、

扉が開き、黒い男が現れた。

出で立ちのままに黒ずくめであり、その白髪と黒髪は綺麗に分かれ、何よりもその顔は——

「ツギハギ……でも、瓢箪じゃない」

「よくわからないが、患者かい？」

「……耳を見る限り、ウマかい」

少女がびくりと体を揺らす。

「そういう貴方は、医者にしては白くないですね。むしろ真逆です」

建物の中は、しつかりとした医療器具があちこちにあった。それは彼女の緊張を高め

ることはなく、むしろ医院であることを雄弁に語っており、緊張を和らげるものだった。

「ま、ここにくる時点で大体は察しがつく。走れるようにしろ、ということだね？」

「はい。できますか？」

「診てみないとなんとも」

そう言うや否や、触診を開始する。

「股関節の脱臼に起因。さらに、それによる座骨神経の圧迫、損傷。そうだったね？」

「そんな感じですよ、たぶん」

ぺたぺたと脚を触りつつ、もう一方の脚も触る。

「怪我をする前から、右が痛かったのでは？」

「多少はありました」

「左も不安だ。無意識の内に、右を庇って走ってしまったのだろう」

触診を終え、レントゲンを撮り終える。

「結論から言えば、日常生活に支障がない程度には戻せるだろう」

「…それじゃあ意味がないんです」

「何、レースが全てではないだろう。甚だ不可思議ではあるが、君たちは力も強いしルックスも良い。そう困ることはないと思うが？」

「それじゃあ！ 意味がないんです！」

彼女が、俯きながらも大声を出す。

「頑張つてきたんです！頑張つて中央に入って、トレーナーが付いて！ようやくデビューして！着になったと思つたら、これで終わりだつて！」

かつて自分が負かした相手が、順調にレースを勝ち進んでいく。対して自分はトレーナーにすら見放され、学園から出て行くことを望まれている。引き摺る脚を見るたびに、医者への疑念、トレーナーへの絶望、ライバルへの羨望、さらに己自身の無力を感じ続けていた。

「多少なりともレースを走っていたなら、諦めもついたかもしれません。でも、たったレースなんです！一度だけ走つて、一度だけ勝利の喜びを味わせておいて、もう走るな？冗談じゃない！」

「そこまで言うなら、覚悟を見せてもらおう」

「…覚悟？」

訝しむような声色とは裏腹に、彼女は微かな違いを感じていた。彼女を診察してきた医者は、少なくとも患者に覚悟を求めることはなかったからである。

「手術料その他諸々で、これだけ頂こう」

男は、ぱつと両手を広げてみせた。

「…100万円ですか？ それとも、1000万ですか？」

「あまり驚かないのかね」

「地方だろうとレースさえ走れば、そのくらいは稼いでみせます。それで、どちらですか?」

ぶつきらぼうに言う少女に対し、男は口角を釣り上げながら告げた。

「どちらでもない。10億円を請求する」

「じゆ、10億!?! そんなお金どうやって!?!」

待っていましたと言わんばかりに、男はさらにやりとしたり顔を浮かべる。

「10億なんて、中央の、それもほんの一握りのウマ娘にしか!」

「だから10億だ。それは、おまえさんが自分の脚に付ける価値だ。トップを取ろうという気迫もないのに、レースに復帰するのかい」

「…」

少女がちらりと見るのは、自分の利き脚、右の脚。不随意にぴくりと動くような、とてもレースには使えない脚。

「さて、どうする?」

「…」

額を汗が伝う。もちろん、彼女は自分の実力に自信を持っていた。少なくとも、生まれてから新バ戦までは負けたことがない。しかし、10億である。そこでふと、彼女は

違和感を抱いた。

「医者なんですよね？」

「そうだと」

「10億も請求したら、法律違反か何かでは？」

「無免許なんでねえ。このところ、また医師連盟がうるさくなってきたがね」

「む、無免許……」

彼女は呆然とした。しかし、堂々とモグリを名乗るその顔は、微塵も動じた気配がない。
い。

「……本当に。本当に、また中央で走れますか？」

「それはお前さん次第だ。治ろうという気がない人間は、どうやったって治らないもんや」

夜の東京・府中。

傷心のウマ娘が寮に帰っていない。ひよつとして…といった具合に、トレセン学園は大騒動になっていた。

「危急ッ！ たづな、状況は？」

「警察にも動いてもらっています。しかし、目撃情報もあまり芳しくはないようです」

「…迂闊ッ！ 心理的なケアを怠った！」

「デスクに拳を叩きつけるのは、学園理事長の秋川やよいである。その音に驚いてか、『少女』の元トレーナーが肩を震わせた。」

「それで、トレーナーさん。最後に会った時、彼女に何か変わった様子は？」

理事長秘書、たづなが問う。

「憑き物が落ちたように、とても晴れやかな顔でして…。失踪するなんて思いもしませんでした」

「軽率ッ！ われわ…彼女達は走ることが本懐！ それを取り上げるとなれば、慎重になることが肝要ッ！」

「そもそも、引退の是非は自らが判断するべきこと。トレーナー側から促すというのは頂けません」

重役二人に詰られつつも、トレーナーは応える。

「しかし…医学的観点から見ても、彼女が走ることは不可能でした。だということに、レースに向かおうとする姿はあまりにも痛々しいものが…」

不意に、理事長室に着信音が鳴り響く。と、人並み外れた速度で受話器が取られた。

「確認ッ！ 見つかったのか!?!」

『はい！ なのですが…』

電話の相手、内線を繋ぐ学園の事務が言いよどむ。

「疑問ッ！ 何か問題が?」

『それがですね、来学の許可を求めています…』

「む? 彼女がか?」

『いえ、彼女を保護したという人物が…』

「確認ッ！ 誰なのだ?」

『それが…』

ブラック・ジャックと名乗っています』

「ブラック・ジャックだと?」

やよいは目を開いて言葉を発し、それを聞いたたづなは僅かな笑みを浮かべる。

「許可ッ！ ここへ案内せよ…ああ、一応入校許可書を書いて貰うように。署名も忘れずにな!」

「貴女が理事長か？」

男——ブラック・ジャックは、怪訝な目でやよいを見ている。

「肯定ッ！　そして君がブラック・ジャックだな」

女、秋川やよいも同じ目をしている。

（理事長…些か小さいが）

（黒い…そして、顔面の継ぎ接ぎ…なるほど）

前者は外見から率直に驚き、後者は自分の知識と外見を照らし合わせていた。

「それで、彼女は？」

「涙目の友人に囲まれていましたよ。…ところで、貴女は私をご存知のようで」

「うむ。…たづな」

やよいは発言を促し、たづなは首肯する。電話からの僅かな時間で用意した資料を手に、彼女は口を開く。

「ブラック・ジャック。本名は間黒男。闇医者として世界各地に赴き、患者に法外な手術料を要求する一方でその技術は極めて高く、依頼が絶える事はない…とのことです」

「うむ、ご苦労！　そんな男が、生徒に何用…とは聞くまでもない、か」

「よくご存知で」

肩を竦めるブラックジャック。

「で？ 当学園、いや、私には何用か？」

「話が早い。…ウマ娘用の設備が揃った手術室を借り受けたい」

「…了承ッ！ メジロ病院に話を通しておこう！」

「ありがたい。では」

ブラックジャックはすつと立ち上がり、そのまま部屋を出ていこうとするも、元トレーナーが慌てて立ち上がる。

「ちよつと待っててください！ 理事長、闇医者ですよ!? それも世界有数の！ そんな輩に、生徒の手術を任せるのですか!?!」

「無論ッ！些かがめついとところがあるが、彼は危険人物ではない!…と、思う」

「しかし…たづなさん!」

「いいんじゃないですか？本人が受けるつもりならですけれど。ねえ？」

「もちろん。契約書はしっかり書いてもらうさ」

おそらく、最も正論なのは元トレーナーである。しかしこの学園においては、理事長が黒と言えば黒なのである。

そうこうしているうちに、闇医者は部屋を去っていった。

「…認めません！こんなこと、認めませんよ！」

語尾を荒げながら、元トレーナーも去っていく。

「…たづな、これで良いのだな？」

「技術については、どこぞの鍼灸師とは比肩になりません。お金については…まあ、出世払いなので頑張ってもらいましょう」

「雑ツ！ それでいいのか？」

「あの人は、払えない額は要求しないでしよう。彼女の能力を見据えているのだと思います」

「昔取った杵柄というものか。彼は気づいていないようだったが」

「…まあ、そんなこともありましたね」

たづなはちらりと足元を見て、すぐに視線を戻す。

「それに、医師連盟は彼をかなりマークしているようです。羽休めの時期というのにも必要なではないでしょうか？」

「震撼ツ！ たづなは時々恐ろしい！」

「嫌ですね。私はただただウマ娘の幸せを考えているだけですのに」

都内某所・メジロ病院。

その名の通り、巨大グループであるメジロ系の病院である。メジロ家がウマ娘の家系であるということもあり、ウマ娘の扱いには慣れているとされる。

「おむかえでござんす」

病院入口で待っていた二人を、鼻の大きな病院関係者が呼びにきた。

「さて、心構えはできたかね？」

「10億…10億…」

契約書にサインした後も、少女はぶつぶつと呪文のように繰り返している。

「おむかえでござんす」

「うるさい！わかつてるよー！」

「ござんす…」

苛立つ少女に怒鳴られ、関係者がすくすくときた道に戻っていく。

「行ったら治る…でも10億…。行くは恥、行かざるは一生の恥…」

「はーい、つべこべ言わずに行きますよー」

メジロだけあって、看護師にも元（現？）・ウマ娘が在籍している。彼女らに押され引かれて、ようやく少女は進み出した。

「10億…10億…」

「はい麻酔いきますよー」

「10お…もう食べられないよお…」

患者が眠りについたところで、外科医たちは気を引き締める。

「メジロ家の主治医です。今日は勉強をさせていただきます」

「こちらこそ、急に押しかけてすまんね。…さて、そろそろ始めようか」

神のようなメス捌きで、手術はスムーズに終わった。

「すばらしい。ブラックジャック、噂に違わない腕でした」

「お前さんの注射技術もなかなかだった。あれなら痛みも少ないだろう」

「お嬢様方に暴れられては命に関わりますので」

病院入口へと向かいながら和気あいあいと話しているところへ、ガヤガヤという人々の声が聞こえてくる。

「深夜だというのに騒がしいですな」

「…いや、これは警察のサイレンです。何か事件でもあったのでしょうか」

と、病院玄関を出たところで警察官がぞろぞろとやってきた。ブラックジャックを見つけると、彼らは真つ直ぐに向かつていく。

「間黒男！ 医師法違反、その他もろもろの容疑で逮捕状が出ている！」

あつという間に取り囲まれ、慣れた様子でバンザイをするブラックジャック。

「…あなた方、ここが病院、それもメジロのそれと知つてのご判断か？」

「メジロがなんぼのもんじやい！ちゅーかおんしら、無免許医に執刀させとるやろがい！ 一緒にしよつ引いたるか！」

どこ出身か分からない警察官が挑発するも、別の警察官が羽交い締めにする。

「メジロはやばいって！そもそも逮捕状ないし！」

ブラックジャックを確保すると、大勢いた警察官はそそくさと立ち去っていった。

もう食べられないよお。

ヒョウタンツギはもう食べ飽きたよお。

まだあるのお？

いやもう……

「いらないつて！」

「起床！ 長い睡眠だったな！」

彼女が目を開けると、そこは知らない天井だった。しかし、自分を覗き込む幼い顔は知っていた。

「えつ……と、理事長さん、ですよね？」

「私もいますよ」

たづなもひよこつと顔を見せる。

「えつ。ここはどこで、何がどうなっているのでしょうか」

「ここはメジロ病院で、貴女は手術を受けました。その結果、無免許の手術をしたとして先生が逮捕されて今に至ります」

「へえ。逮捕ー。ん、逮捕？」

「肯定ツ！ なかなかまずいことになったぞ！」

「いや、どつどつどつどうするんですか。いや、これは手術代がチャラになるとかそういう——」

「はいそこまで。一旦落ち着きましょう」

お茶の入ったコップが差し出され、少女は一息に飲み干した。

「はあ。…そもそも、なぜお二方はここに？」

「うむ！ 君の手術には我々も一枚噛んでいる！彼に対しても、それなりの負い目というものがあるのだ！」

「そもそも、貴女の元トレーナーさんが医師連盟の関係者でして…。手術の話聞いて、どうやら警察を動かしたみたいなんです」

「そこでだ！彼を上手いこと解放させ、さらに君にとつても悪い話ではないプランがあるー！」

ごくり、と喉が鳴る。誰のものは言うまでもない。

「彼はトレセン学園所属で、君のトレーナーだった！そしてトレーナーの業務範囲として、君に治療行為を行った！というテイだ！」

「より正確には、トレセン学園保健室長兼ウマ娘担当トレーナーだった、というテイですね」

職権乱用どころか、捏造行為である。しかし、トレセン学園では理事長が以下略。

「いや、えっ。あの、大丈夫なんですか？」

「白か黒かで言えば、真っ黒だ！」

やよいが扇子をぱつと開くと、そこには「漆黒ッ！」という文字が。

「そ、それで。私は何をやらされるので？」

「簡単なことです。記者会見で、『マツサージの延長上の行為』とでも言って下されば」

「マツサージ（外科的行為）だな！」

「えっえっ」

「あら、理事長。そろそろお時間が」

わざとらしく言う秘書に対して、

「そうか！そんな時間か！」

わざとらしく答える理事長である。

「そういうことで、お願いしますね」

そう言い残して、去っていった。

「え。え。あの…その…」

「ということでした。あ、これ差し入れです」

留置場のアクリル板を挟んで座るのは、緑の秘書と黒い闇医者である。

「いいんですか？ 後ろに刑務官がいるのにそんな話をして」「いいんですよ。…よろしくお願いしますね？」

たづなに声をかけられた刑務官は、帽子を取って一礼する。隠れていた二つの耳が露わになった。

「怖い怖い。なるほど、最初から私に手術をさせて医師連盟を挑発するつもりだったと。逮捕によって私の退路をなくしたわけだ。ただ一方、トレセン学園を除いて」

「でも、逮捕されるほど目をつけられていたのは、元々の先生自身の行動のせいですよ？」

「よく言う。そもそも、私はいつ学園に所属したことになるのです？」

「それはまあ…こんな感じで」

たづなが取り出したのは、昨日の入校許可証である。一枚紙をめくると、そこにはカーボン紙、その下には契約書が挟まっている。

「ちゃんとサインがありますから。合意がなければ契約は成立しません。でも、両者が合意してしまえば成立するんですよ。今先生がサインを認めてしまえば、事後的に契約成立です」

「…いいんですか？ 学園が医師連盟と対立するということですがね」

「知っていますか？ ヒトはウマ娘には勝てないんですよ」

にこりと、悪魔にも天使にも見える笑顔が生まれた。

「わからない。そこまでして私を呼び込むのはなぜですか？」

「…ウマ娘という生物は、走ることをやめられませんが。たとえ怪我をしても、治った後にはまた走る。食べることも大好きで、ふとしたことで寝不足に陥り、しかも肌荒れにも悩まされる。どうしようもない生物なんです」

懐かしむかのように語る。

「これまででも、これからも。怪我や病気というものは、ウマから笑顔を奪い去ります。でも、貴方なら。きつとみんなの笑顔を取り戻してくれる」

頭に手をやると、たづなは帽子を脱ぎさった。

「既に一人、救われていますから」

かつて、一人のウマ娘がいた。

彼女は怪我をし、さらに病毒に身体を蝕まれた。

手術は成功したが、しばらくの安静を余儀なくされた。

しかし、総じてウマとは腹を減らす生き物である。普段食堂でたらふく食べている身体は、まだかまだかと食を求め。

しかし、男の医者 of 小さな医院であるし、米くらいしかない。そもそも調理にかける時間もない。しかたなく、医者は自分のストックを与えた。山ほどあつたストックも、みるみるうちになくなっていった。

「いつか返します」

腹の虫を鳴らしながら、赤面しながら、彼女はそう言っていた。

つまり、どういふことかと言えば。

「ボンカレーは、どう作っても美味しいのだ」

留置場の格子から月を眺めながら、差し入れを食べる男がいた。